

武蔵野日曜講筵

人の子は枕する所なし

—ルカ伝9章51～62節—

1991年3月3日

小池辰雄

御顔を堅くエルサレムに向けて 神のみぞ判断し給う 義と愛 無一物 魂之霊 至る所を枕
とする 汝の信仰 我に従え 至る所、自分の使命を為す所

【ルカ9】

51 イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、御顔を堅くエルサレムに向けて進まんとし、⁵² 己に先だちて使を遣したもう。彼ら往きてイエスの為に備をなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、⁵³ 村人そのエルサレムに向かいて行き給うさまなるが故に、イエスを受けず、⁵⁴ 弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言う『主よ、我らが天より火を呼び下して彼らを滅ぼすことを欲し給うか』⁵⁵ イエス顧みて彼らを戒め、⁵⁶ 遂に相共に他の村に往きたもう。

⁵⁷ 途を往くとき、或人イエスに言う『何処に行き給うとも我は従わん』⁵⁸ イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は塹あり、されど人の子は枕する所なし』⁵⁹ また或人に言いたもう『我に従え』かれ言う『まず往きて我が父を葬ることを許し給え』⁶⁰ イエス言いたもう『死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の国を言い弘めよ』⁶¹ また或人いう『主よ、我なんじに従わん、されど先ず家の者に別を告ぐることを許し給え』⁶² イエス言いたもう『手を鋤につけてのち後を顧みる者は、神の国に適う者にあらず』

●御顔を堅くエルサレムに向けて

ルカ伝9章57節から後は、特にルカ伝が非常に詳しいですが、キリストはガリラヤからいよいよ最後のエルサレムへの旅に上られる、その最初のキリストの姿のところですよ。51節から始まる。これは他の共観福音書、マタイ、マルコにはそうは出ていない。少しはありますけれども。それだけ、このルカ伝のキリストのエルサレム上りは非常に特色のあるものです。

「イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、御顔を堅くエルサレムに向けて進まんとし」

この51節は非常に力強い節です。「天に挙げられる」といきなりこんなことを言っている



のは、十字架に懸かって昇天することです。その時が満ちた、いよいよそのカイロスが来た。と
 「彼が取り上げられる日（複数）が満ちてきたので」

とギリシヤ語では、そういう言い方をしている。まさに「取り上げられる」という——「天に」という言葉はないけれども——そういうことなんです。この「取り上げられる」という言葉は、聖書ではここしか使っていない。非常に重要な言葉です、キリストの昇天ということとは特別なことだから。「アナレームプセオース」という言葉です。

「御顔を堅くエルサレムに向け」

左顧右眊しない。キリストはいかに驚くべき決意——決意といたって人間的な決意ではないけれども——で向かったか。だから「御顔を堅くエルサレムに向け」と書いてある。エルサレムは見えませんが、そこをもう凝視しておられる。肉眼で見えないものもキリストには全部見えていますから。51節のこういうキリストの姿は我々の信仰の在り方にとって非常に大事なわけです。人生はいろんな事にでつくわします。そして左顧右眊したり、迷ってみたり。キリストはそういうものは一切顧みない。自分の使命のためにまっしぐらに動いて行く。

私は19歳の時に福音の世界に入った。旧制高等学校の一年生です。私は哲学や文学をいろいろやりましたけれども、福音から離れようと思ったことはもちろん一度もない。その点では、貫かれていたと言えらると思う。一番先に書いた文章、『祈りの哲学』という文章がある。もうその時に、聖霊のことが最後に書いてあるので、自分でも驚いた。

●神のみぞ判断し給う

「村人そのエルサレムに向かいて行き給うさまなるが故に、イエスを受けず」

サマリヤ人というのは、ユダヤ人と仲が悪い。キリストはそんな区別はなさらない。敵であろうが、味方であろうが、とにかく本当の人間は全部、キリストは見ておられる。

典型的に人間を判断することは悪いことなんです。昔の「無教会」が、「カトリック」をすべて悪いものとして判断したり、

「教会は形式的でダメだ」

と判断したりする。いろんなことはあるでしょう。けれども、どこにしようが、どういう集いに属しているようが、どこにも本当の人はいる。人間をそういう類型的な判断をしてはいかん。神さまの人を見る目は、絶対にそんなことではない。クリスチャンであろうがなかろうが、神さまは天国に入れる者は入れ給う。大いに聖書を勉強していながら、

「どうしてー」

とキリストに断られる人がある。その人が天国入りの人か、「ちよつと待て」の人間か、地獄入りか、それは神のみぞ判断し給う世界です。人が人を判断してはいかん。

とにかく、サマリヤ人がキリストを



「あれはユダヤ人だから」

と、入れないわけだ。キリストの本質なんか判りつこないから、それで、お断りだ。お宿はつくらない。もともと、キリストはお宿なんてものはあまり問題にしていらつしやらない方です。

「弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言う『主よ、我らが天より火を呼び下して彼らを滅ぼすことを欲し給うか』」

ヤコブとヨハネは兄弟です。このヨハネは「ボアネルゲ」「雷の子」というあだ名を持っていた。

「けしからん奴らだ、天から火を呼んで滅ぼしたらいかがですか」

てなわけだ。弟子が言いそうなことだ。エリヤが火を呼んだり、火の中に入って行つたという故事から来ているんでしょう。キリストは「そんな心配してはいかん」というわけです。

「イエス顧みて彼らを戒め、遂に相共に他の村に往きたもう」

「そんなものは相手にしなくていいから、他に行こう」

と。キリストは相対的な争いはなさらん。

大体、宗教の世界で、争うのはおかしい。その点は、仏教は割合に争いが少ない。いろんな宗派があるけれども。日蓮は烈しいことを言った。今でも日蓮宗のご連中はキリスト教を非常に敵視しているようだけれども、とんでもないはなしだ。私は日蓮宗を一つも敵視しません。日蓮は結構ですから、日蓮そのものは。亜流は困るんだ、亜流が。大体、マホメットは困つたもんだ。左手にコーランを持ち、右手に剣を持つのは。宗教の世界で剣を持ったのではダメだ。キリストの言の通り、剣を持つ者は剣で滅びる。

宗教は、インチキな宗教でない限り、それぞれの善さというものがあるから、お互いに認めて、そしてお互いに尊重していけばいい。その点、パレスチナに対してはイスラエルもちよつとうまくない。パレスチナ問題というのは確かにイスラエルは譲歩しなければならぬ面があります。とにかく、砂漠の民族というのは相当血なまぐさい。日本でも、こんなに温暖な国でありながら、封建時代、戦国時代はひどいものだ。人間というのはしょうがないものだ。

●義と愛

義ただしい事に対する、義の火は持っていないければいかん。けれども、それをすぐ現してはいかん。それはキリストを見ればわかる。キリストは唯だ一人の義人でした。神さまに完全に従っていた。神さまに完全に従うことが「義」なんです。いわゆる道徳的な「正義」ではない。神意に是れ従つた。だから

「この私をなぜお棄てになるか」

と十字架上で叫んだ。あれは義の主張なんです。



「この義が認められなかったら、天地がひっくり返る」と、そういう叫びです。あの叫びはなければならなかった叫びなんです。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と。「我を」ではないんだ、本当は。あの「我」は、

「この義をなぜ破りたもうか」

ということ。あの叫びをしたから、キリストは今度は、その義が人に与える義になって、

「彼らを赦してやってください」

と、愛に変わるんです。愛というのは、

「私の義をみんなにやる」

ということです。

「信仰によつて義とされる」

というのはそのことです。「義とされる」でなく、「キリストから義をたまわる」んだ。「信仰義認」なんて、あんな観念的な言い方はダメなんです。

「キリストを受けとると、キリストの義がやってくる」

ということ。「義のキリストが」と言った方がなおいいくらいです。義のキリストが入ってくる。聖霊のことです。それは愛と一つですから。義のキリストも、愛のキリストも同じこと。だから、「十字架と聖霊」というのは、「義と愛」と言ったっていい。ちょうど十字形になる。

●無一物

それでエルサレムに向かって行かれた。それでもやつぱりサマリヤは通ったことは通った、すこし東の方に外れたけれども。

「途を往くとき、或人イエスに言う『何処に往き給うとも我は従わん』」

マルコ伝10章17節に、

「イエス途に出で給いしに、一人はしり来り跪きて問う……」

という有名な話がある。あれもこの途上の話です。ルカ伝にはそれは書いてない。

「イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅あり。されど人の子は枕する』」

所なし』」

と。有名な言です。

日本の仏教のお坊さんたちは、枕する所ないようにして、行脚したのがかなりいる。托鉢して食べ物ももらっては動いていた。ああいう姿が「枕する所なし」だ。その最たるものが、一遍上人だ。一遍上人というのは大変な人です。本当に無一物だ。良寛も無一物だが、良寛よりももう一つすごいのは、この一遍の方です。

キリストも何も持たない。天衣無縫的な衣があつて、あとは、泊めてくれる人の所に泊まっ



て、自分の家なんてものは無い。キリストは大体、ナザレから出されてしまった。いつも裸足で歩いている。絵のキリストは、だいぶ美化されて描いているけれども、キリストを乞食の姿に描かなければ、本当はダメなんだ。

ローマ法王なんてものは、とんでもないな、あれは。キリストの代表なんていうけれども、三重の冠なんか被って、おかしくてしょうがない。仏教でもそうだ、いわゆる上の方の坊さんになると、金ぴかの袈裟なんか着けたりして、お釈迦さんが笑っているわ。

荘厳な教会堂で、何だか宗教的な気持になって——悪くはないよ、悪くはないけれども——本質はそんなものではないということですよ。内村先生が「無教会」と言った気持も、非常に大事な面がある。いたる所これ教会であり、いたる所これ神殿である。キリストは正にそうである。キリストは神殿でもお話しした。神殿をぶつ壊そうとはしなかった。けれども

「やがて崩れる時が来るぞ」と仰った。

●魂之霊

相対的なものを問題にするのは、やっぱり相対的な判断なんです。相対的なものは、あれどもなきが如し、無けれどもあるが如しで、それはどうでもいいんだ。

「相対の奥に絶対を見るか、持っているか、相対を絶対的な相に変えることができるか、そういうものが中にあるか」

ということだけが問題なんです。我々個人もそうです。みなこれ相対的な存在です。けれども、一人びとりが絶対なんです、神さまにあれば。その絶対を神さまはちゃんとつくっているではないですか。I君という青年がいる。これと同じ青年は世界中にいない。即ち神さまは人間を絶対的なものとしてつくっている。人間ということにおいては、みな同じなんだ。けれども、その個をとってみると、それと同じものは一つもない。だから、私は

「神さまは最大の芸術家だ」

と言っている。

「人ひとりの魂を失わば、全世界を得るとも何の益かあらん」

とキリストが言ったのは、そのことです。個の価値は全世界よりも重い。I君を左の天秤に乗せて、地球を右の天秤に乗せると、I君の方が重いんだよ、地球よりも。普通の物理では考えられない、そういう世界がキリストの、神の世界なんです。一人びとりが、一人の魂はそれほど大事なものだ。それをいい加減にしている。

魂とは「たましひ」「魂之霊」と書く。一人びとりの魂が神の相に即してつくられている。そういう神秘的な驚くべき真理は、普通の道德の世界だけではダメなんです。



だから、本当は学校で素晴らしい宗教の話はしなければいけない。信ずる信じないは別問題です。けれども、本当は話はしなければいけないんだ。日本の教育がいつまでたつてもダメなのは、そこにある。公立はダメだから私立に入ろうとする。ところが、私立の校長が本当に目が醒めている人が少ないから、本当に困ったものだ。日本はその意味で本当に望みがない。だから、望みなきところに望みを持たせるものは、我々なんです。あなた方です。一人びとりなんです。

存在が即、伝道の使命を持つている、道を伝える使命を持つている。人に道を伝えなかつたら、なにもクリスチャンである必要はない。聖霊が来ると伝えざるを得ないわけだ。この喜びを、この生命を、この光を人に伝えないでいられませんということになる。遠慮は要らん。けれども、何でもかんでもと、強引なやり方はよくない。彼らの伝道の熱心は買いうよ。しかし、やり方はどうかと私は思います。

●至る所を枕とする

「狐は穴あり、空の鳥は嗚ねぐらあり、されど人の子は枕する所なし」

と。キリストは自然界をよく見ている。これは詩ですよ。素晴らしい詩だ。神の真理というものは、波動的なものだから、詩的な調子になる。預言書が詩でしょ、詩篇がもちろん詩です。キリストやパウロの素晴らしいところは、みなあれは散文詩なんです。単なる説明ではない。説明しているような世界はダメなんだ、断言的に告白している世界でない。

「人の子は枕する所なし」

ということとは逆に言うのと、

「人の子は至る所を枕としている」

ということ。どこでも結構でございと。行脚僧がそうだ。途に行き暮れば石を枕にして寝るといふ。

とにかく、あなた方はじつとしていらつしやるけれども、魂は宇宙を飛んでいるようなことではなければ。浅間の火山も阿蘇の火山もかなわなような霊的な火が燃えていなくては。み霊の火が、たましひの霊ひが燃えていなくては。

至る所を枕とする。私は至る所を書斎としている。必ずポケットに本が入っている。カバンに本が入っている。電車の中でも必ず読んでいる。人の顔なんか見てない。至る所これ書斎なりと。本を読んで目は目をつぶる。今度は祈りの世界だ。何も集会所ばかりが祈りではない。日曜ばかりが日曜ではない。毎日が日曜日です。

●汝の信仰

それが本当の生活なんだ。私は「信仰生活」なんて余り言いたくない。あの「信仰」という言葉はなんだか勿体ぶつた言い方でね。一三言目にはよく



「信仰、信仰」

と言う人があるけれども、嫌やだねこれ、耳障りで。だから私は、

「信仰なんかありません、何もありません。ただ、キリストに圧倒されて、その力がやって来るから、あり難くてしょうがありません」

と、それだけの話なんだ。そういう在り方が、キリストが「汝の信仰」と仰る在り方なんです。

「汝の信仰、汝を救えり」

というあの言が躓きになる。

「そうですか、私はまだ信仰がダメだから、大いに信仰を深くしないと救われませんか」

なんて。そうではない。「汝の信仰」というキリストの言は、

「お前が自分を何ともしないで、私に、神さまに全托している、そのことが救いなんだ」

ということだ。「汝の信仰」というのは。「信仰」というサムシングではない。普通のクリスチャンはみな「信仰」を何ものかにしている。無教会でも

「無教会信仰」

なんて言って、「信仰、信仰」と言っている。

「信仰のみで行為ではない」

なんて、そんな二段構えの世界ではない。

こういうことをはつきり言うものだから、私は嫌われる。本当だからしょうがない。それを私はどうしても、これから十年かかって書くところの詩でもって全部告白する。その告白も本当におもしろいよ、私は楽しくてしょうがない。昼も夜もなし、東も西もなし、そういう渾然たる世界です。

「ひと」とは「靈止」と書く。神の靈が止まっている存在を靈止ひとという。我々はみな枕する処あんぎやを持っている。

「それでは行脚に出掛けるか」

と、そんなことはしなくていい。枕する処を持つていながら、枕する処なしという境地を魂で持たなければいかん。相對界あんぎやにありながら、絶対界を歩いてるような魂にならなければダメなんです。

「穢土即極楽」

というのが、そのことです。穢土あんぎやにありながら、即それを極楽として歩いているかということ。本当の悟りの世界にいくと、穢土即極楽というのは、そういうことなんです。普通の人にはその極楽が見えない。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を見ると、キリストは天国を、極楽を現しながら歩いてた。大変な靈止です。そのキリストの本当の姿が



見えていない。私は福音書を見ていると、本当にたまらないね。意味ではない。これは天国、天界の現実なんだ。

●我に従え

59 また或人に言いたもう『我に従え』

「我に従え」とは、

「我が弟子となれ。我が道を往け」

ということですよ。キリストに本当に従ったら、キリストと一緒に十字架に懸からなくてはならない。できないんだ、本当は。キリストはできないこともはつきり仰る。「我に従え」なんて言ったって、誰も従えやしない。ちよつと従ったかと思ったら、すぐ逃げて行ってしまう。これは十字架道だから。十字架への道だから、恐ろしい道なんだ。殉道、道に殉ずることになる。

聖書は「教え」の本ではない。「道」の本だ。道を歩かせるところの「ドラマ」だから。我々一人びとりは路を歩く、各々の足で。だから「路」なんだ。この路が天界の「道」、天道に即する歩き方が本当の歩き方です。それを「道路」という。本当の道路だ。私に言わせる「道路」という言葉は宗教的な言い方だ。一人びとりの「路」は、その人でなければ歩けない路みちです。みんな違う。違わなければウソなんです。それが「道」に即しているから、違いながら、みな一つになっている。いわゆる全体主義ではない。単なる個人主義でもない。花はみんないろいろ違うけれども、太陽の光を受けているということにおいて一つだ。キリストの霊を受けていることに於て一つ。姿はそれぞれ、香りはそれぞれ。それでなければ、百花繚乱でなかったら、面白くない。

かれ言う『まず往きて我が父を葬ほうむることを許し給え』。60 イエス言いたもう『死にたる者に、その死にたる者を葬ほうむらせ、汝は往きて神の国を言いひらめよ』。

と。ギリシヤ語にもそう書いてある。これはギリシヤ語の原典が間違っている。「原典」なんていつても、元はアラミ語ですから、アラミ語の聖書が本当なんです。言い伝えでもって、アラミ語で言い伝えているのをギリシヤ語に直した。新約聖書のギリシヤ語原典というけれども、実は所々間違いがある。それは、アラミ語をギリシヤ語に直すときにまちがえた。

「ミッターはマッターに任せろ」

「死人は葬儀屋に任せろ」

という言葉なんです。キリストは何も難しいことを仰らなかつた。

「死んだ人は葬儀屋に任せて、お前は神の国を伝えろ」

と仰つた。ヘブライ語は母音を書かないから、子音だけだから、「ミッター」も「マッター」も子音は同じだ。それで、しまったということになる。ところが、どの注解をみても、それを書いてない。おかしな話だね。



「こういうことですから、ああいうことですから」

と、相対的な理由はいろいろあるでしょう。しかし、

「それをなお乗り越えろ」

と、キリストは言っておられる。

「随分キリストは非常識だなあ」

と思うかも知れないが、いつも非常識であるわけではない。大事な福音のことに関しては絶対に譲れないというところが、キリストの世界なんです。何をするのも、キリストが本当にそこに中心になつていっているかが問題なんです。日曜講筵を休んだとか、休まないとか、そういうことではない。楽でしょ、私の言っている真理は非常に自由だから。

「自由」

ということとは、

「いい加減」

ということではない。本当の天の法則に従っているところに自由があるということなんです。

61 また或人いう『主よ、我なんじに従わん、然れど先ず家の者に別を告ぐる』

ことを許し給え』。62 イエス言いたもう『手を鋤につけてのち、後を顧みる者は、

神の国に適う者にあらず』

神の国の人とは、そんな左顧右眄は要らないんだと。キリストがこういうことを言うものだから、

「どうもクリスチャンになると、狭くなつてしまつてしょうがないな」

なんて思う。しかし、

「儀文は殺し、霊は活かす」

というが、キリストの言を本当に受けとれば、その精神を、その気迫を受けとれば、その時その時にどのように自分が路をとるかを示される。

●至る所、自分の使命を為す所

生きた真理というのは、いわゆる普遍妥当ではない。カントが道徳哲学の方でよく「普遍妥当」ということを言ったけれども。道徳の世界の一つの規準としては、「普遍妥当」であるでしょうけれども、あそこはカントの哲学の一つの弱点なんです。長所でありながら弱点です。それに対して、やっぱりキルケゴールあたりは違う。カントは哲学の世界だから。哲学の限界ももちろんカントは知っていますが。

「アルゲマイン・ギュルティッヒ」(Allgemein=gütig 普遍妥当)

ではない。

「アインツェルネン・ギュルティッヒ」(Einzeln=gütig 個別妥当)

なんだ。個々の人にとって妥当なところの路がある。それが、御意が現じてくるところ



の路なんです。この人はこの場合にこういう方に行かなければならない。あの人はこの場合にあの方に行かなければならない。その人その人によって、行くべき路が違う。Aの人は、こつちへ行くことがキリストに即すること。Bにとっては、あつちへ行くことがキリストに即すること。それを平面で比較して、

「どつちが本当ですか」

と、そういうことではない。そういう歩き方をするとところに、聖霊における自由というものがあつた。自由は天的必然の世界です。

しかし、人間の世界は、どうやったつて要するに完璧なことはありえない。相対的な世界にあつて、いかにそれを天的に動いていくか。自分自身も躓いたり、転んだりして結構だ。しかしながら、本来の目的に向かつては邁進しているという姿でなければダメなんだ。そのためには、邁進させられるところの驚くべきものが、導き手がいれば、躓いても転んでも必ず進んで行く。ところが、その導き手を持たない人は結局最後にはかすんでしまう。キリストの今日のところは、そういうことではないかと思う。

「人の子は枕する処なし」

というのは

「至る所を枕とするような人になれ」

ということなんです。どこでも枕だと。歌を歌う人なら、どこでも是れ歌を歌う場所だと。みんなそうです。私は至る所是れ書齋と書いている。何か見ても、何か聞いても、それが自分の中心問題にパツと来る。中心を持って動いていると、そこからヒントが来る。不思議なものなんです。私は道を歩いていて、行き違いに会話が聞こえるでしょ。会話の片言隻語がパツと響いた時に、私の今問題にしていることに對する或る一つの指針を与えられたりする。不思議なものだ。知らぬ人よありがとう、というわけだ。私は馬鹿ですか。馬鹿です、一番馬鹿です。良寛みたいに大愚という。

あなた方一人ひとり、いろんな使命を持って生きていらつしやる。

「至る所、自分の使命を為す所なり」

と、結論はこれだけの話です。自由無碍むげというのはそういうことです。

